

武蔵野日曜聖書講筈

キリストの霊力

――マタイ伝第8章1～17節――

1993年6月20日

小池辰雄

平伏して 平伏して聖霊をいただく 霊言 タート・ウム・タート 霊的なイスラエル 天国
を現しながら歩いている 御霊を食べ飲む

【マタイ8】

1 イエス山を下り給いしとき、大なる群衆これに従う。2 視よ、一人の癩病
人みもとに來り、拝して言う『主よ、御意ならば、我を潔くなし給うを得ん』
3 イエス手をのべ、彼につけて『わが意なり、潔くなれ』と言ひ給えば、癩
病ただちに潔まれり。4 イエス言ひ給う『つつしみて誰にも語るな、ただ往
きて己を祭司に見せ、モーセが命じたる供物を献げて、人々に証せよ』

5 イエス、カペナウムに入り給いしとき、百卒長きたり、6 請いて言う『主よ、
わが僕、中風を病み、家に臥して甚く苦しめり』7 イエス言ひ給う『われ
往きて医さん』8 百卒長こたえて言う『主よ、我は汝をわが屋根の下に入れ
奉るに足らぬ者なり。ただ御言のみを賜え、さらば我が僕はいえん。9 我
みずから権威の下にある者なるに、我が下にまた兵卒ありて、此に「ゆけ」
と言えば往き、彼に「きたれ」と言えば來り、わが僕に「これを為せ」とい
えば為すなり』10 イエス聞きて怪しみ、従える人々に言ひ給う『まことに汝
らに告ぐ、斯る篤き信仰はイスラエルの中の一人にだに見しことなし。11 又
なんじらに告ぐ、多くの人、東より西より來り、アブラハム、イサク、ヤコ
ブとともに天国の宴につき、12 御国の子らは外の暗に逐い出され、そこに
て哀哭・齒嚙することあらん』13 イエス百卒長に『ゆけ、汝の信ずることく汝
になれ』と言ひ給えば、このとき僕いえたり。

14 イエス、ペテロの家に入り、その外姑の熱を病みて臥しおるを見、15 そ
の手に触り給えば、熱去り、女おきてイエスに事う。16 夕になりて、人々、
悪鬼に憑かれたる者をおおく御許につれ來たりたれば、イエス言にて霊を逐
いだし、病める者をおおくことく医し給えり。17 これは預言者イザヤよりて『か
れは自ら我らの疾患をうけ、我らの病を負う』と云われし言の成就せん為なり。



●平伏して

マルコ伝1章40～45節、ルカ伝5章12～16節が並行の記事です。キリストの周りには群衆がしよつちゆうやつてくるわけですが、その中に一人の癩病人が御許に来て拝した。マルコ伝では、

「ひざまず 跪き請こいて言う」（マルコ1・40）

ルカ伝では、

「ひれふ 平伏して、願ねがいて言う」（ルカ5・12）

という表現になっている。原語からいうとルカ伝の

「平伏し」

というのが一番当たる。或る時はマルコ伝のように、それが「ひざまず 跪く」になる。マタイ伝の「拝して」というのは姿がちよつと分らない。「プロスキュネオー」というギリシア語で、平伏して足か差し出した手に接吻するような気持をもった字です。ドイツ語でも英語でもそういう訳がついてます。

らい病人は皆に嫌がられる病人です。アツシジのフランチェスコが初めにらい病人に遭った時に嫌な気持で逃げるようにしたけれども、非常にそれは間違っていたということの後から悟ったという話があります。

私も実はらい病人のいる病院を訪ねたことがある。私は手をおきました。聖霊の流れがこちらから行くので、少しも恐くはない。院長さんが

「そんな事をする人は他にいなかった」

と言いました。

今日は

「キリストの霊力」

と題しましたが、キリストは、本当にどのような人も受けとられる。全身でキリストに向かってくるものは——疑うものや批判するものはダメです——キリストは無条件に受けとられる。

旧約聖書でも、らい病というのは非常に嫌らしい病気だといって、レビ記にいろいろ書いてあります。レビ記14章1節から

「エホバ、モーセに告げて言いたまわく。²癩病人らいびんのきよめらるる日の定例のりは是かくのごとし。即ちその人を祭司もくの許もとに携もえゆくべし。³先まず祭司いえ営いより出でて

ゆきて観み、祭司いえもし癩病人らいびんの身みにありし癩病かんしよの患い処えいたるを見みば、⁴祭司い

そのきよめらるる者もののために命いのちじて生なけるきよき鳥とり二羽ふたはねに香柏こうはくと紅くれないの線いとと

牛膝草ヒソップを取りきたらしめ、⁵祭司いまた命いのちじてその鳥とり一羽ひとはねを瓦やまものの器うつわの内うちにて

活い水みづの上に殺ころさしめ、⁶而しかしてその生なける鳥とりを取り香柏こうはくと紅くれないの線いとと牛膝草ヒソップを

も取りて之これをかかの活い水みづの上に殺ころしたる鳥とりの血ちの中にその生なける鳥とりとともに濡ひた



し、7 癩病より潔められんとする者にこれを七回灑ななたびそそぎてこれを潔き者となしその生ける鳥をば野に放つべし。云々」(レビ14・1～7)

と。そういうような事をして癒いやしをやった。癩病についてレビ記13章にも書いてある。

「12 イエス或る町に居給うとき、視よ、全身癩病をわずらう者あり。イエスを見て平伏し、願いて言う『主よ、御意みこころならば、我を潔きよくなし給うを得ん』」(ルカ5・12)

この「平伏し」という訳が一番当たっている。

「主よ、御意ならば、我を潔くなし給うを得ん」

このところは、マタイ、マルコ、ルカとも同じように書いてある。

3 イエス手をのべ、彼につけて『わが意こころなり、潔くなれ』と言ひ給えば、癩病ただちに潔まれり。

マルコ伝とルカ伝には、

「直ちに癩病さりて、その人きよまれり。」(マルコ1・42)

「イエス手をのべ彼につけて『わが意こころなり、潔くなれ』と言ひ給えば、直ちに

癩病されり。」(ルカ5・13)

と、らい病が「されり」と書いてある。「潔きよれり」という言い方はマタイ伝だけです。

「わが意こころなり、潔くなれ」

と。こういうところを読んでもキリストの霊的な力がいかにもの凄いかという事が分かる。

「イエス手をのべ、彼につけて」

と書いてありますが、キリストは言うだけで、遙かな距離の人を直ちに癒したりする。大変な方です。キリストというひとは本当にケタが違う。

●平伏して聖霊をいただく

私はこういうところを見ると、本当に参ってしまう。先が読めなくなる。そして、癩病人と同じように平伏してしまう。キリストに対する我々の態度は、この平伏しよりか他にない。これはやはり「降参」という字なんです。

「イエスを見て降参して、願いて言う」

と、初めから降参してしまう。

我々は平伏して、どうするかというと、聖霊をいただく。もの凄いキリストの霊的な力、これは聖霊の力です。聖霊は非常に内容の豊かなものです。力ばかりでない。聖霊の一番根源的なものは愛です。サタンに対しては愛ではない、これは怒りです。愛とは憐あわれみだから、

「かわいそうだ」

という憐れみの気持でキリストの力が働く。このケタ違いなキリストの秘訣は、聖霊である。だから、私たちは聖霊をいただくことが非常に大事なわけです。



平伏しは無の境地です。この無も十字架から来た。
「己を捨てて」

というような、捨て、身のかたちがこの無なんです。十字架で無とされた。罪無き者とされた。罪を、自我をすつ飛ばされた。根源において自我はすつ飛ばされた。無我、我が無い。無我は十字架で賜った無我です。この無我は即ち、無のすがたが平伏しなんです。そこには聖霊が能く。

だから、キリストに降参して——降参せしめられて——無とされる、無我とされる。そうすると、そこには聖霊がはたらく。聖霊がやつてくる。だから、

「十字架と聖霊は離すことができない」

と、しょつちゅう申し上げているわけです。その境地でキリストがこの癩病人を癒した。我々は、困っている人、苦しんでいる人、病める人に手を按おいて、キリストの霊、聖霊の働きをそこに現さなくては。聖霊の働きを現すことをしないのは、本当はクリスチャンではない。癩病という病いが癒され潔められた。我々は「罪」という霊的な病いを十字架ですつ飛ばされた。だから、霊的な病いも、肉的な病いもみなキリストが私たちを潔める、救う。これが本当の救いだ。霊的にも肉体的にもキリストのものとされることが救いなんです。ローマ書8章で、

「聖霊なき者はキリスト者にあらず」

とパウロが言っているとおりです。

「そうか、キリストはそうしたか」

なんてだけではダメなんです。我々もこのキリストの聖霊をいただいて、このキリストの霊力を、聖霊の力を現さなくてはいかん。そして、困っている人を、病める人を助けてあげなくてはいかん。人助けが本当の愛ですから。我々はそのような聖霊の力の実力者にならなくては。その実力をいただいでいなければ、キリスト者にあらず。一般のクリスチャンはみなダメだ、落第なんだ。どうぞ、落第しないようになしてください。

我々はこのキリストの聖力を頂いて、とにかく、人助けをしていかななくては。結果は考へなくていい。本当に全身で聖霊の愛によってなせば、それでよろしい。結果が現れなくても——また、現れようが——そんなことは心配しなくていい。神さまの方は、

「もう少ししたって、治してやる」

と、直ぐでないかも知れない。そういうことは一々考えることは一つも要らない。ただ、為すべきことは為す、というわけです。

「主よ、御意ならば、我を潔くなし給うを得ん」

「わが意なり、潔くなれ」

と言ったら、

「癩病ただちに潔れり」



と、凄いな。なにしろ、棺桶にちよつと手を置いて、「起きよ」と言えば、死人が甦るようなひとだから、大変なものです。

4 イエス言い給う『つつしみて誰にも語るな、ただ往きて己を祭司に見せ、モーセが命じたる供物を献げて、人々に証せよ』

レビ記の定めに従ってやりなさい、ということをやキリストも旧約のやり方をそのまま命じていらつしやるわけです。レビ記14章19節、

「19 斯してまた祭司、罪祭を献げ、その汚穢を潔めらるべき者のために贖罪を為して、然る後に燔祭の牲を宰るべし。20 而して祭司、燔祭と素祭を壇の上に献げ、その人のために祭司贖罪を為すべし。然せばその人は潔くならん。」(レビ14・19～20)

「燔祭」というのは動物を焼くことです。「素祭」は野菜です。

「己を祭司に見せ……」

とは、このレビ記のことをキリストは思われて、言われたわけです。

● 霊言

5 イエス、カペナウムに入り給いしとき、百卒長きたり、6 請いていう『主よ、わが僕、中風を病み、家に臥して甚く苦しめり』7 イエス言い給う『われ往きて医さん』8 百卒長こたえていう『主よ、我は汝をわが屋根の下に入れ奉るに足らぬ者なり。ただ御言のみを賜え、さらば我が僕はいえん。』

「百卒長」とはローマの人です。なかなか、この人は大したものだね。

9 我みずから権威の下にある者なるに、我が下にまた兵卒ありて、此に「ゆけ」と言えば往き、彼に「きたれ」と言えば来り、わが僕に「これを為せ」といえば為すなり』

「そういうわけですから、あなたのお言葉だけでたくさんです」というわけだ。

10 イエス聞きて怪しみ、従える人々に言い給う『まことに汝らに告ぐ、斯る篤き信仰はイスラエルの中の一人にだに見しことなし。11 又なんじらに告ぐ、多くの人、東より西より来り、アブラハム、イサク、ヤコブとともに天国の宴につき、12 御国の子らは外の暗に逐い出され、そこに哀哭・齒嚙することあらん』

「御国の子ら」というのはイスラエルの系統の人です。

13 イエス百卒長に『ゆけ、汝の信するごとく汝になれ』と言ひ給えば、このとき僕いえたり。

「いらつしやらなくて結構です、お言葉だけで結構です」

「こんな信仰はイスラエルで見たことがない」



とキリストが誉められた。キリストの言というのは、キリストの心と一つです。心に思うと、心に思っただけで、それが言葉に発すれば、直ちに癒えてしまう。この言は霊だから。霊言なんだ。

聖書を研究したり、討論をしたり、そんなことをやっていたら、聖書を読めるどころでない、だんだん聖書から遠ざかってしまう。

●タート・ウム・タート

「初めに言あり」

というのは、

「初めに行為あり」

ということですよ。キリストの言は力を持っているから、直ちに力をもった行為なんです。行為に裏付けられない言葉は空しい。

「御意を行う者が天国に入る」

とキリストは言われた。

「信ずる者」

ではない。単なる「信ずる」ではダメです。この信は即、行でなければダメなんです。一般のキリスト教は非常にただ「信」なんだ、

「信仰、信仰」

と言っている。「信仰」はやめたらいい。「行」の世界です、実存の世界です。

「ドゥー(行為)」

の前に

「ビー(存在)」

がある。本当に、本質的にそのもので「在れ」と。そうすれば、必ず「行為」が展開する。この「ビー」と「ドゥー」は離してはいかん。禅宗だって、無の世界でただ坐禅を組んでいるだけではダメです、行にならなければ。

「信仰、信仰」

と散々言っていたパウロが一番、行の人だった。大伝道をしている。生命賭けでやっている。決して観念ではない。

「キリストを信ずる」

とは、「信ずる」だけではダメです、身受しなければ。受けとらなければ。体受、身体に受けとる。身受、体受していく。

「キリストを受けとる」

とは、

「聖霊のキリストを、キリストの聖霊を受けとる」



ということですが。

皆さんはここで静かに聞いていらつしやるけれども、もう月曜からは「行また行」です。ドイツ語でいうとゲーテの、

「タート・ウム・タート」（行為また行為）です。

「人間はタート・ウム・タート（行また行）で行け」ということ。あの言葉のゲーテが非常に行為的なんです。

日本の政界はしょうがない。今は本当の人物がいらない。大人物がいらない。人物がいなければダメです。日本の教育は人物教育ができていない。頭ばかりだ。

「成績の良いのがいい」

なんて、冗談じゃない。

「人間をつくれ」

ということですが。

●霊的なイスラエル

8 百卒長こたえていう『主よ、我は汝をわが屋根の下に入れ奉るに足らぬ者

なり。ただ御言のみを賜え、さらば我が僕はいえん。』

「あなたのお言葉だけでたくさんです」

という、この百卒長の言葉にキリストは、

「こんな信仰はイスラエルにはない」

と。ローマの兵隊の方が本当の信仰をもっている。キリストは驚いて喜んだ。イスラエル人が、

「自分たちはアブラハムの子孫だ」

なんて言っても、そんなものは天国から追い出されてしまう。異邦人が、他の民の人が――ローマであろうとギリシアであろうとどこだっていい――本ものはどこ人であろうと、本ものが天国に入ってくる。血統的なものを、いくらイスラエル人なんて言ってもダメだ。本当のイスラエルとは違う。我々は霊的なイスラエルです。なにもイスラエルへ行く必要はない。

「まことのイスラエル人はこつちだぞ」

と言えるわけです。

10 イエス聞きて怪しみ、従える人々に言い給う『まことに汝らに告ぐ、斯る

篤き信仰はイスラエルの中の一人にだに見しことなし。』

「いわゆるイスラエルには一人もいない」

と、キリストは言われた。おもしろいね。



「イスラエルの人たちは、自分たちは御国の子らだなんて思ったって、みな追い出されてしまうぞ」と。

11 又なんじらに告ぐ、多くの人、東より西より来り、アブラハム、イサク、ヤコブとともに天国の宴につき、¹² 御国の子らは外の暗に逐い出され、そこにて哀哭・齒嚙することあらん』¹³ イエス百卒長に『ゆけ、汝の信ずることく汝になれ』と言ひ給えば、このとき僕いえたり。

「汝の信ずることく汝になれ」

というのは、

「お前がかくも私を受けとつたそのようになるぞ」

ということ。信仰がサムシングではない。信仰がサムシングになって、

「私の信仰は……」

といつて、今度は「信仰」を問題にしたらおかしなことになる。苦しくなる。

「信仰なんかありません、あなただけです。キリスト教ではありません、キリストだけです」

ということ。教えるではない。

「キリスト教」

なんていう言い方は私は嫌い。教えたと思つて、一生懸命で勉強して、教えに一生懸命で従おうとする。そんなことをしたら、くたびれてしまうだけだ。

「キリストそのものを受けとれ」

ということ。そうしたらば、キリストの言っていること、している事がみな身に付いてくる。頭で分かるのではない。身に付いてくる。とにかく、質と角度が違うんだ。

●天国を現しながら歩いている

¹⁴ イエス、ペテロの家に入り、その外姑の熱を病みて臥しおるを見、¹⁵ その手に触り給えば、熱去り、女おきてイエスに事う。¹⁶ 夕になりて、人々、悪鬼に憑かれたる者をおく御許につれ来たりたれば、イエス言にて霊を逐いだし、病める者をごとく医し給えり。¹⁷ これは預言者イザヤよりて『かれは自ら我らの疾患をうけ、我らの病を負う』と云われし言の成就せん為なり。随分、悪鬼に憑かれたのがいるんだね。霊を追い出した。

「昔は医学が進んでないから、何でも病気を悪鬼に憑かれたという」

なんて言う人があるけれども、それは霊の世界を分かってないからだ。そうではない。それは本当に悪鬼なんだ。

「いろいろな霊がいるから、それをわきまえろ」

とパウロが言っているとおりです。サタンの働きで動いているやつがいる。単なる性格的



な問題ではない。しかし、何でもかんでもすぐ「サタン」ということを言うような人があ
るけれども、それもまたいかん。

苦しんで亡くなった人の慰霊をしていないと、それがまた悪い働きをすることがある。
いろいろなことがありますから、そういった縦の関係もちゃんと祈りをもつて執り成さな
いといかん。お墓には小さい子供なんかは連れていかない方がいい。

幽霊なんかもそうなんだ。苦しんでいる霊なんだ。

「どうしましたか?」

と聞いて慰めてやるだけの力を我々は持つているはずなんです。恐がる必要はない。この
キリストの聖霊ほど素晴らしいものはないので、他の霊をひとつも恐がる必要はない。

「聖霊にあつて」

とか、

「キリストの名において」

と言えば、サタンは、悪い霊は逃げていく。

盛んに「悪鬼」ということが書いてあるな。みな、キリストは追い出して癒してしまった。
とにかく、福音書を読んでいて、

「キリストがいかにもの凄い霊の力を持つていらつしやるか。そして、天国を現じ

ながら歩いていらつしやるか」

ということに圧倒される。福音書は、キリストがそこに天国を現しながら歩いていて。楽
園を、パラダイスを現しながら歩いている。闇の世界を光の世界に変えながら歩いている。
それで、福音書は素晴らしいし、楽しい。それと同時に、私たちもその力に与かろうとし
ていかなければダメです、

「キリストは特別だから」

なんて言っていないで——「特別」には相違ないんだけど——それに与^{あず}かなければい
かん。与かるためには、どこまでも十字架・聖霊の事態をいよいよ深めていく。限りなく
進んでいく。

聖書は何のために読むかという点、私たちはそういうような力を本当にいただくために
読む。読みながらその力を頂かなかつたら、しょうがない。ということは、瞑想すること
です。深くジーツと瞑想する。瞑想したら、瞑想が今度は深い祈りになる。キリストの中
に祈り入る。祈入する。自分をキリストの中に投げ入れていく。そして、主と我とは一つ
になる。主我一如です。一如にされる。それが本当の聖書の読み方です。

私が語るとみな驚く、

「何か違う」

といって。ということは、私は聖霊の力でもって、聖霊の現実で語っているからです。普
通はそこまで来てないものだから、説明になつてしまう。説明ではダメなんだ、本当の告



白にならなければ。聖書を読んで研究して説明して何になるか。説明的な話は聞いていて、あくびが出てしまう。

●御霊を食べ飲む

「この故に汝らに告ぐ、人の凡ての罪と瀆けがしとは赦ゆるされん、されど御霊を瀆けがすことは赦されじ。誰にても言をもて人の子に逆らう者は赦されん、然れど言をもて聖霊に逆らう者は、この世にても後の世にても赦されじ。」(マタイ12・

31～32)

と、恐ろしいことをキリストが言っている。

「聖霊に逆らったらダメだぞ」

と。ところが、聖霊に逆らっているのがいるんだ。そいつがどういうことになるか知らないよ。

聖霊を受ける姿は平伏しです。だから、このらい病人がキリストの前に平伏した。そうしたら、癒されてしまった。我々は平伏してキリストの十字架という門を通って入っていく。そこは聖霊の世界です。

「我は門なり、我は十字架という門なり」

ということ。

「その先は、詩篇23篇のような緑の牧場まきば、憩いの水汀みぎわ、聖霊の天国的な所へ入って

いく」

と。聖霊の世界は楽園、パラダイスだから。

聖書を読んでいると、文字の後ろから力が来てしようがない。力がきて、生命がきて、ありがたくてしようがない。それを「キリスト教」なんて言って、かしこまって読んでいたらダメです。くたびれてしまう。「教」ではない。

「わが言は霊なり、生命なり」

なんだから。霊を、御霊を、生命を、キリストの永遠の生命をいただく。だから、聖書は、「読む」のではない。聖書を「食べる、飲む」。キリストがヨハネ伝で

「我を食らえ、我を飲め」

「我を食らわずば、永遠の生命はないぞ」

と言われた。本当はその通りです。

「とんでもないことを言う人だ。どうやって食べるんだ」

なんて、ユダヤ人がつまづいた。キリストの御霊を食べ、飲むんです。言葉というものは暗号みたいだから、しようがない。現実を自分で体験するまでは分からない。体受・体験・体現しなければ。

